

基 調 講 演 要 旨

ハーブソン Hokkaido

2015-2017 報告

徳田龍弘

[北海道爬虫両棲類研究会]

ハーブソンは徳田がバードソンやフラワーソンにヒントを得て両生爬虫類を対象にはじめたイベントだった。2003年と2004年に両生類爬虫類同好者の間で日本全国を対象に、決められた期間にどれだけ多くの両爬を確認できるかの競い合い目的が大きかった。当時は参加費を募り、集まった金額を野生動物関連施設に寄付を行っていた。現在行っているハーブソンHokkaidoは、参加者から両爬の生息記録を集め、種ごとの生息マップを作成している。過去のハーブソンと比べ、調査的な目的を大きくし、まとめたデータを報告書として一般に提供している。また過去のハーブソンのように、競技として楽しめるように賞を設けて参加意欲の向上も狙っている。2012,2013年はそれぞれの年度に報告書を作成したが、金銭的な問題で発行し続けるのは難しかったため、2015～2017年は3年分のデータを蓄積し、まとめた報告書を北海道新聞野生生物基金の助成を受け2018年1月に発行した。今回の2015-2017の参加者は、のべ43チーム・235名であり、特に2017年は道内4箇所での講演と説明会により、参加者の増加があったように感じられた。結果は調査地区(10×10kmの2次メッシュ)にして200エリアを超えた。ハーブソンでの北海道の全エリア数は987なので約1/5に調査者が入ったことになる。本年行われたフラワーソン2017の500エリア超と比べるとまだまだ少ないが、それでも過去にはマイナーだった両生類や爬虫類といった分類群の調査が進んできていることについて、嬉しく思う。

在来両生類であるエゾアカガエルやエゾサンショウウオでは多くの記録も取れ、人口の多い地域に近い場所は生息状況がカバー出来つつあるように思われる。一方、外来のカエル、特にアズマヒキガエルなどでは、新規分布地が確認されるなど、広がりや予想できるデータも集まってきている。また未定着と考えられるがニホンヤモリやアカハライモリなど新しい移入動物の確認、飼育由来と思われるシロヘビ(アオダイショウ)の確認などもあった。こうした現状もあることから、飼いや野外への外来種の影響、物資の移動リスク等については、一般の方々にも、もっと伝えられるよう努力が必要になると考えている。こ

の点では、一般への知識の普及に大きな影響力を持つ報道等媒体や教育現場などにも、インパクト中心の情報だけでなく環境生態的な考え方を普及していただけるよう報告を活用頂いたり、働きかけを行えたらと考えている。

また調査のデータの収集では、調査票による結果の提出を調査期間後に求めているが、まとめて書くことの大変さや、数ヶ月前に撮った写真を引っ張り出すなどの面倒もあり、集まりは決して良くはない。ハーブソンではtwitterなどのインターネット媒体での収集も行っているが2017年は特にネットでの情報収集を呼びかけたところ、ネットでのデータ量が多くなり、データ数が全体的に増えた。調査票だと調査者がデータをまとめ直さなくてはならないが、twitter等では両爬を見つけたその都度、報告できる手軽さがあるからだと考えられる。スマートフォンやパソコンの一般普及も進んでいるのでアプリケーション(「iNaturalist」や「いきものログ」のような)による報告の簡便化を今後取り入れていけたら、さらに報告数が増えるのではないかと考えている。

2012,2013年のデータは道レッドリストなど動物行政の参考としても使われた実績もでき、今後のデータもいろいろな調査研究などにも活用されて行ってもらえたら幸いと考えている。

各種についての結果のまとめや考察は、ハーブソンHokkaido 2015-2017結果報告書をご参考いただきたい。

埼玉県でもハーブソン? 博物館 企画の県民調査で調べた爬虫類

藤田宏之

[埼玉県立川の博物館]

埼玉県の爬虫類相についてまとめた資料は、『埼玉県動物誌』での報告が挙げられるが、近年は存在していない。埼玉県立川の博物館では、2014年度夏期企画展「ふしぎ・かっこいい埼玉と日本の爬虫類」において県民参加型企画として、県民から寄せられた爬虫類の生息情報を基に、大型バナーの地図に生息記録地点プロットした「みんなで作る埼玉県爬虫類マップ」を作成した。

生息情報の収集は、同年4月中旬よりチラシ、ポスター、webによる一般市民への発信をおこない、Eメール、館内の投書箱、郵便によって受け付けた。また、博物館内でも聞き取りもおこなった。さらに学校、行政、関係公共機関、研究者、ナチュラリストにも働きかけ生息情報を集め

た。展示期間中に埼玉県広報広聴課の協力を得、県民へ SNS による生息情報募集中の発信も実施した。

結果、過去生息が記録されている種全種の情報を得ることができ、特にニホンヤモリの都市部での生息情報は県民より数多く得られた。また、過去記録のなかった都市部でのシロマダラなど生息情報の得にくい種もマップに加えることができ、最新の埼玉県の爬虫類相となり得る企画となった。

爬虫類は、特にヘビ類は目にする機会も少なく、ルート

センサスなど調査で成果が得られにくい生物である。また、住宅地でのルートセンサスは住民の理解を得るのが難しいと考えられる。今回公募による情報収集によって数多くの住宅地内からのヤモリ・カナヘビの生息情報を得ることができ、さらに学校や公共機関からの聞き取りではヘビ類の生息情報を多く得られた。このような参加型調査企画は爬虫類相の解明に有効と考える。さらに、都道府県単位でのレッドデータブック作成の基礎データにも活用可能と考える。

発表要旨

エゾアカガエルの繁殖時期と繁殖行動

竹中 践 (東海大・生)

エゾアカガエルの繁殖時期、繁殖行動などについて、札幌市南区中ノ沢の繁殖地において1989年から調査・観察を続けている。そのデータの中からいくつかを紹介する。中ノ沢の繁殖地は砂防堤が形成する水たまりで、雪解け時期に水位変化があるが、安定的な繁殖場所となっている。エゾアカガエルは早春に繁殖し、繁殖時間帯は昼間と夜間の両方となることがある。中ノ沢繁殖地では昼間の産卵が多い。これは繁殖時の天敵が少ないことが要因と考えられる。エゾアカガエルは、1匹の雌個体は1季節に1卵塊を産み、多数の雌が同じ箇所産卵することにより卵塊群が形成される。中ノ沢繁殖地では卵塊群の形成箇所が繁殖時期の早期から後期にかけて移動していく。繁殖するときの雄雌ペアは産卵のタイミングを慎重に見計らい何時間も様子見を行うことがある。産卵開始は日最低気温が氷点下になることが少なくなってきた。中ノ沢繁殖地では4月上旬であることが多い。しかし、年によっては産卵開始後に気温が低下することがあり、凍結して死卵を生じることがある。一方で、産卵が遅れるとアメンボの捕食などの危険があり、5月に産卵する個体はほとんどない。その他に産卵が集中する時期の年変化などを報告する。

アライグマ(?) によるヒキガエル捕食の多発生

八谷 和彦 (深川ひきがえるバスターズ)

要旨

アズマヒキガエル (以下、ヒキガエルと略) が繁殖する

池において、アライグマによると見られるヒキガエル成体の被捕食死体が多数観察されたので報告する。

2017年5月、深川市音江町の大小19個の池において、ヒキガエルの調査、観察、あるいは駆除対策(ドリフトフェンスとかご罠の設置、夜間の巡回捕獲)を行っていたところ、全ての池でヒキガエルが見つかるとともに、11個の池で数個体から数十個体の被捕食死体が観察された。これまで、2015年は6個、2016年は12個の池で同様の調査等を行ってきたが、被捕食死体は1つの池で年に2、3個体見られた程度であったので、2017年は箇所数、個体数ともに急増した状況であった。

捕食のされ方や、アライグマの生息情報などから、捕食者はアライグマであると考えられた。ヒキガエルが繁殖のため池に来る数日間に捕食が集中していることや、捕食された11個の池が東西約11kmの範囲に散在していることから、捕食者は1個体ではないことや、ヒキガエルが池に来る時期より前から付近を行動していたことが推察された。

死体の状況は様ではなく、腹側から内臓を中心に食べられていることが多かったが、剥いだ皮膚のみが残されていたり、かご罠に入ったヒキガエルの脚や下半身が網目の外に引き出されて食べられていることもあった。死体があった場所は、かご罠付近に比較的多く、水中(池、水路、水田など)にも地上(フェンス脇、農道、畦畔など)にもあった。かご罠が噛み切られたり破壊されることはなかった。捕食がかご罠の捕獲個体数を減らしている可能性や、ヒキガエル駆除に役立っている可能性が考えられた。

この北海道の指定外来種アズマヒキガエルと国の特定外来生物アライグマとの食物連鎖を、どう捉えたらよいのだろうか。